国語

注意

1 問題は 1 から 4 までで、18ページにわたって印刷してあります。

2 **受検番号**を、解答用紙の決められた欄に記入しなさい。

3 答えは、全て解答用紙の決められた欄に記入しなさい。下書きは、問題用紙の余白を利用しなさい。

4 答えは、**特別の指示**のあるもののほかは、各問の**ア・イ・ウ・エ**のうちから、最も適切なものをそれぞれ**一つずつ**選んで、答えの欄に、その**記号**を記入しなさい。また、答えに字数制限がある場合には、、や。や「などもそれぞれ一字と数えなさい。

5 記号を書くときも、文字を書くときも、明確に書きなさい。

6 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを記入しなさい。

7 提出するのは、**解答用紙**だけです。

1

次の各文の傍線を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書きなさい。

(1) スーツの型紙に合わせて布をサイダンする。
(2) 海外の友人からユウビンが届いた。
(3) 遠くから列車のキテキが聞こえる。
(4) 製品の品質向上のためゼンショを求める。
(5) 彼の新記録はシュウモクを驚かせた。
(6) 研究過程についての詳しい説明はハブく。
(7) 有名な議員のキョシュウに注目が集まる。
(8) 土地をタンポにして資金を調達する。
(9) 美しい満月が湖の水面にウツる。
(10) 問題がヤサしいので高得点が期待できる。

2

次の各問に答えなさい。

〔問1〕 次の例のように空欄に漢字一字を当てはめると、矢印の方向に読むことで二字の熟語を四つ作ることができる。問題の空欄に当てはまる漢字を楷書で書きなさい。

〈例〉

〈問題〉

〔問2〕 「水がジョウ発する。」の傍線を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書いたときの総画数は次のうちどれか。

ア 11　イ 12　ウ 13　エ 14

〔問3〕 次の意味を表す慣用表現の空欄部分に当てはまる漢字一字は次のうちではどれか。

〈意味〉すっきりとさわやかになる。

〈慣用表現〉□がすく。

ア 首　イ 胸　ウ 腹　エ 足

〔問4〕 次の語のうち、意味・用法が他の三つと異なるのはどれか。

ア どれ　イ そこ　ウ その　エ あそこ

〔問5〕 次の各文のうち傍線部の敬語の使い方として適切なものを**全て**選びなさい。

ア 田中さんの娘さんはお医者様になられた。

イ 資料を配らさせていただきます。

ウ そちらの絵はご覧になられましたか。

エ どうぞ召し上がってください。

〔問6〕 「草の戸も住み替はる代ぞ雛の家」（芭蕉）と同じ季節を詠んだ俳句は、次のうちではどれか。

ア びいと啼尻声かなし夜の鹿（芭蕉）

イ 道のべにたまたま土筆一つかな（正岡子規）

ウ 小春日のしずかにしずかに暮れゆけり（山口青邨）

エ 水に入るごとくに蚊帳をくぐりけり（三好達治）

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えなさい。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

吉住友梨は、父が会社を辞めて家事をになっていることを恥ずかしいと思い、学校では内緒にしていた。友梨が高校一年の夏、父は農業を始めることになり、町から離れた母の実家に一家で引っ越した。その家には曽祖母が一人で住んでいて、幼い頃にもしばらく一緒に暮らしたことがあった。友梨は引っ越した後も転校はせず、電車で通学している。

「あれ、なんて野菜？　白っぽいの」
丸山*のほうから話しかけてくるなんて、初めてではないだろうか。渡り廊下で、友梨は立ち止まる。すぐ外にある水飲み場にいた彼は、確かにこちらを見ているから、友梨に声をかけたのは間違いなさそうだ。
「吉住の弁当に入ってただろ？」
そういえば、昼食の時間にそばを通りかかった丸山に、お弁当をじっと見られたような気がしていたが、気のせいではなかったらしい。
「うん……、白いパプリカ。めずらしいでしょ？」
クラスの数人で話の輪に加わっていても、彼は頷いているだけで言葉を発することが少ないのに、よほどパプリカが気になったのだろうか。白いパプリカは、お父さんが育てたのだ。まだ収穫量は少ないし、家で食べているだけで、色も真っ白というよりほんのり黄色味がかっている。
「白いのってあるんだ。味は？」
「お弁当のはピクルスだから……」
ピクルスの味、なんて言えば、自分でつくったのではないことがバレてしまいそうで、友梨は口をつぐんだ。続きを待っているのか、丸山も黙っているから、微妙な空気が流れる。
「ふつうのパプリカと同じだよ」
赤いのと黄色いのでも味は違うんだと、お父さんが言っていたのを思い出すが、友梨にはよくわからない。料理が得意なはずなのに、パプリカの微妙な違いを同じだと言うなんておかしい、と丸山が思ったかどうかはわからないが、まだ納得できないように、友梨をじっと見ている。それ以上突っ込まれたくないから話をそらそうとして、彼が流しで洗っていたらしいお弁当箱に、友梨は目をとめた。
「お弁当箱、いつも洗って帰るの？」
彼は頷く。
「丸山のお弁当っていつも凝ってるよね。お母さん、料理上手なんだろうなって、みんな言ってるよ」
無難な話題だったつもりだけれど、彼は気分を害したように見えた。

「ピクルス、どうやってつくってんの？」
また話が戻る。ぶっきらぼうな口調はいつもそんなふうだけれど、今はもっと攻撃的に聞こえた。実際、彼にとってはそういう意図(a)だったのかもしれない。
「えっ、どうって……」
「つくりかた、教えてよ。自分でつくってるんだろ？」
「興味、あるの？　料理に？」
「あるわけないだろ」
支離滅裂だ。
「……そうだよね。料理なんてできなくても、おいしいもの食べられるもんね」
彼はにらむように友梨を見ている。ピクルスのつくりかたなんてわからないから、友梨は困惑したまま黙っているしかない。
友梨から視線をそらし、洗い終えたお弁当箱を勢いよく振って水気を切る。(1)小さなしぶきが、キラキラと舞う。友梨は、お父さんが畑に撒く水に虹が光るのを思い浮かべる。お父さんはいろんな野菜をピクルスにして、瓶を並べている。家の台所では、色とりどりの瓶が、窓辺でキラキラ輝いている。
「本当に料理できんの？」
(2)そうか、丸山は、本当のところ友梨が自分でお弁当をつくっていないのではないかと勘ぐっているのだ。でも、だからって、突っかかってくるのはどうしてだろう。
お弁当袋に洗ったものを放り込んで、丸山はくるりと背を向ける。友梨は黙ったまま、彼の背中とぶら下げたお弁当袋が遠ざかるのを眺めていた。
使い込んだお弁当袋だ。紐を通したところがほつれている。何度も洗って使い込んだ生地も、ずいぶん色あせていた。
友梨はふと気がついた。*芽依の好きな男子は、丸山だ。同じフットサル部だし、芽依が言っていたように、母親が料理上手で完璧だというのも合う。何よりあのお弁当袋だ。新しいものをつくってあげたいと思ったに違いない。
それにしても、友梨は不愉快な気分だった。どうして丸山は、友梨のお弁当のうそに気づいたのだろう。思い浮かぶのは、芽依が話した可能性だ。芽依とはまた、以前のようにつきあえそうな気がしていたのに、やっぱり気を許してはいけないのだろうか。

いや、そもそも友梨がお父さんのことを秘密にしているからややこしいのであって、父親が家にいることくらいどうってことはないと割り切ってしまえば、何の問題もない。実際に芽依にとっては、友梨の家の事情なんて、ちょっとした会話の足しでしかない。隠すほどのことでもないと思っているのだろうし、悪気はないから話してしまうのだ。

しかし、芽依から聞いたとしても、丸山にとっては聞き流すようなことではなかったのか。どういうわけか、友梨のうそが気に障(b)っている。

いったい何なの？　こんがらがった毛糸みたいに、ほどけそうにない。

しゃしゃもしゃや〜

もしゃしゃの中のしゃしゃもしゃや〜

帰りの電車を待ちながら、友梨は駅のベンチで編み物をする。部活ではウサギを編んでいるが、学校を出たらオタマジャクシだ。

編み物が好きなのは、思い描いたものが少しずつできあがっていくからだ。手を動かせば、だんだんと形になる。選んだ色と、編み方の組み合わせ、編み目を飛ばしたり増やしたりすれば形も変わる。友梨の手の中で、オタマジャクシができていく。頭の中にあったものが、目の前に現れる。でもウサギは、友梨が考えたものじゃない。

作業は同じだけれど、たぶん友梨は、編むことそのものよりも、想像したものをつくり出すことが好きで、その手段がたまたま手芸だっただけなのだ。

だったら友梨は本当に手芸が好きなのだろうか。手芸部は女子部員ばかりだ。女の子らしい趣味なのに、足の生えかけたオタマジャクシは女の子らしくないからバザーには出せないなんてことに引っかかって、せっかく好きなものを編んでいても楽しめない。つい乱暴に毛糸を引っ張ってしまうからか、固い結び目ができてしまう。(3)

もしゃしゃなければ

しゃしゃもしゃもなし〜

いったい、もしゃしゃって何だろう。

「ふうん、オタマジャクシか」

顔を上げると、*和島瑛人がこちらを見下ろしている。はっとして、友梨は*編みぐるみを急いでカバンに突っ込んだ。
「なんで隠すの？」
「ていうか、どうして瑛人くんがここにいるの？」
「叔母さんのお見舞い。病院がこの近くなんだ」
それで彼も帰るところらしい。
「もしゃもしゃって何？　今つぶやいてただろ？」
「絡まった糸をほどくおまじない」
「じゃあ、ちゃんとほどかないと、ますます絡まるよ」
彼の言うとおりだ。どうせオタマジャクシは見られてしまったし、友梨はあきらめて編みかけを取り出す。
「おまじないで、本当にほどけるの？　やってみてよ」
瑛人は隣に座って、興味津々で友梨の手元を覗き込んだ。ひいおばあちゃんに教わったとおりに、唱えながらほぐしていく。やがてきれいにほどけると、瑛人はまじめな顔で驚いている。
「不思議でしょう？　いつも時間がかかってうんざりするんだけど、呪文を唱えたらずっと早くほどけるの」
「へえ、ほどこうとあちこち引っ張るより、無心になってまんべんなく力を加えたほうが、糸がゆるむってことなのかな」
「じゃあ、呪文は何でもいいのかな？」
「いや、その言葉にも力があるんじゃない？　糸をほどく呪文だっていう意識で、昔から使われてたなら、きっと言霊が宿ってるんだ」
「言霊って、言ったことが本当になるってやつね」
「うん。そのゆるーいリズムや音のイメージで、リラックスできるのも効果的なんだろうな」
「なるほど、そうなのかも……。ひいおばあちゃんは、小鬼を追い払うって言ってたけど」
(4) 小鬼か、と瑛人は楽しそうに笑う。こういう話題でも小馬鹿にしないから、友梨は瑛人と話すのが好きだ。
「小鬼が毛糸に、一生懸命結び目をつくってるとすると、数学のできる奴らだね」
「数学？　どうして？」

「結び目理論っていうのがあって、紐状のものは、自由に動いているうちに必ず絡まってしまうんだって。で、そのパターンも決まってる、らしい」
「じゃあその、決まったパターン以外の絡まり方はしないってこと？」
「うん、だからそのもしゃしゃの神さま？　もパターンを熟知してて、小鬼がどの結び目をつくっても、たちどころにほどいてしまうんだよ、きっと」
小鬼と神さまが数式を駆使して対戦しているところを想像し、友梨は笑ってしまった。
「オタマジャクシ、後ろ足が生えかけてるんだね」
「これね……、ま、瑛人くんになら見せてもいいか」
カエルになるなんて、とても想像できないようなオタマジャクシ、そこに足が生え、尻尾がなくなるなんてどういうことだろう。幼かった友梨には神業(c)としか思えなかったから、編みぐるみをつくるとなったときに思い浮かんだのだ。
「秘密にしてるの？」
「オタマジャクシを編みたいって言ったら、みんな気持ち悪いって言うのよね。もっと女の子らしい動物の編みぐるみにすればって。でも、女の子らしい動物って、なんだろ。哺乳類ならドブネズミでもいいの？　よくわからないな」
「そうか、オタマジャクシ。友梨ちゃんらしい」
瑛人が笑う。彼には、ゆったりとした独特のテンポがある。どこか周囲とは違う空間にいるかのようなのだけれど、地元で会うときも、繁華街の駅でも変わらない。友梨は巻き込まれて、オタマジャクシでもやもやしていた気持ちも消え失せる。
「小さいころ、田んぼのオタマジャクシを真剣に見てたよね？　友梨ちゃんは、虫も花もトカゲでも、興味津々だったからなあ」
たぶん、マンション暮らしでは見ないものが、ひいおばあちゃんの家やその周囲にはたくさんあって、じっと見ていても飽きなかった。思えば瑛人も、そういうものをずっと見ていられる子供だったから、よくいっしょに過ごしていたのではないだろうか。
長い時間ふたりで、黙って田んぼの縁に座っていたから、お互いが現実の友達なのか空想なのか、曖昧にもなったのかもしれない。
「これも、後ろ足とお腹の渦巻きにすごいこだわりを感じるよ。この感じ、形とか」
女の子らしく、お姉さんらしく、高校生らしく、何かとそんなふうに言われてきて、疑問ばかりが頭に浮かぶのに、友梨らしいという瑛人の言葉には、不思議とキラキラした思いで胸を満たされる。(5)編みかけのオタマジャクシが、友梨の手の中で、ほわっと

あたたかくなったように感じられる。

もしゃしゃのおまじないがほどくのは、糸だけじゃないのだろうか。

「らしいって、何だろうね。わたしなんて手芸部で、お弁当を自分でつくってるからって、女の子らしいって言われることあるけど、編みぐるみは不気味だし、お弁当は自分でつくってるなんてうそだし」

「ふうん、そんなうそついてるんだ」

どういうわけか、瑛人には話せてしまう。お父さんが家事をしていることを、隠す必要がないからか。

「だって、野菜にこだわってててヘルシーだし、やたらおしゃれな女の子向けのお弁当なのに、お父さんがつくってるなんて言いにくくて。それに、お父さんが無職だってこと、中学のときにはいやなこと言う子もいたから」

友梨のお父さんは、みんなのお父さんとは違う。毎日家にいるし、ジャージ姿で昼間からスーパーで買い物をして、家族のご飯をつくる。ゴミ出しも、掃除もアイロン掛けもする。

でも、それは恥ずかしいことだろうか。

「この前ね、クラスの男子にお弁当のこと突っ込まれたの。ピクルス、どうやってつくるのかって。わたし、わからなくて答えられなかったけど、あの子はうちのお父さんが無職だって知ってるのかも」

「知ってて、わざとつくりかたを訊(き)いてきたってこと？」

そんな気がする。

「答えられなかったら、本当に料理できるのかって言われた。彼のお母さんは料理上手で、毎日お弁当が凝ってるの。とにかく完璧な人らしいから、できもしないのにできるふりしてる女はむかつくのかなあ」

「完璧なお母さんか。そんな人いるのかな」

瑛人が首をかしげると、くせのある前髪がふわりとゆれる。また友梨は、不思議なものを見ている気分になる。

「うちのお母さんは、酒造りに詳しいけど、全く飲めない」

「えっ、ホント？」

飲めないのは意外だけれど、ちゃんと仕事ができるなら問題ない。ただ、それを完璧じゃないと思う人もいるのだろう。でも、そんなのは偏見で、和島酒造(わじましゅぞう)の奥さんでもある瑛人の母親は、ご近所でも評判の若女将(わかおかみ)だ。

完璧の基準なんて、人それぞれなのだとしたら、どうしてみんなは、丸山の母親を完璧だと思うのだろう。

待っていた電車が、ようやくホームに入ってくる。友梨と瑛人は立ち上がる。うっかり膝から落としてしまった毛糸玉を瑛人が拾う。

友梨のカバンからつながった、藍色の毛糸玉を持ったまま、瑛人は歩き出す。(6)オタマジャクシの渦巻きから、まっすぐ伸びた糸が彼につながっているのが、なぜか妙にくすぐったかった。

（谷瑞恵「神さまのいうとおり」による）

〔注〕丸山（まるやま）――友梨の同級生。
芽依（めい）――友梨の中学からの同級生。
和島瑛人（わじまえいと）――曽祖母の家の近所に住む友梨の幼なじみ。
編みぐるみ――毛糸を編んで形を作り、中に綿などを詰めた人形。

〔問1〕本文中の傍線を付けた(a)〜(c)の漢字の読みを書きなさい。

(a) 意図　(b) 障って　(c) 神業

〔問2〕(1)小さなしぶきが、キラキラと舞う。友梨は、お父さんが畑に撒（ま）く水に虹が光るのを思い浮かべる。お父さんはいろんな野菜をピクルスにして、瓶を並べている。家の台所では、色とりどりの瓶が、窓辺でキラキラ輝いている。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 小さな水しぶきのきらめきによってお父さんのまわりで光る虹と窓辺に並ぶ瓶の美しさを対照的に描き出している。

イ 勢いのある水しぶきの動きを通してお父さんが一生懸命に畑仕事をしている日常の光景を躍動的に描き出している。

ウ 目の前の水しぶきの光でお父さんの仕事やピクルスをもっと自慢したい友梨の気持ちを象徴的に描き出している。

エ 水しぶきの輝きがお父さんとピクルスの存在を友梨にありありと想起させているさまを印象的に描き出している。

〔問3〕(2)そうか、丸山は、本当のところ友梨が自分でお弁当をつくっていないのではないかと勘ぐっているのだ。とあるが、ここでいう「勘ぐっている」の意味に最も近いのは、次のうちではどれか。

ア　決めてかかっている
イ　勘違いしている
ウ　疑いの目で見ている
エ　確かめようとしている

〔問4〕(3)つい乱暴に毛糸を引っ張ってしまうからか、固い結び目ができてしまう。とあるが、この表現から読み取れる「友梨」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　編みぐるみがうまくできないのは女の子らしくないからだと部活のみんなから決めつけられて、自分は本当はどうしたいのかわからなくなりやけになっている様子。
イ　女の子らしさを求められて意に反してウサギの編みぐるみを作ることになり、もともと好きだったはずの編み物なのに素直に喜びを感じられずいら立っている様子。
ウ　女の子らしい編み方や色合いを工夫してウサギの編みぐるみを作ればバザーの人気商品にできるだろうと、期待がふくらんで張り切って力が入り過ぎている様子。
エ　手芸は大して得意でもないのに女の子らしくしようと無理をして編みぐるみを作っているので、気分が乗らず絡まってしまった糸をほぐそうとむきになっている様子。

〔問5〕(4)小鬼か、と瑛人は楽しそうに笑う。とあるが、この表現から読み取れる「瑛人」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　友梨が不思議がっているおまじないをめぐって自分なりの解釈をやりとりするのが愉快な上に、ひいおばあちゃんによる説明の表現が絶妙なので感心して心を弾ませている様子。
イ　友梨が信じ込んでいるおまじないに関連付けて適当にからかっていると、ひいおばあちゃんの言葉を持ち出してもっともらしく反論してきたのでますます面白がっている様子。
ウ　友梨が絡まった糸をおまじないでほぐすのが不可解で何とか説明を付けようとしてみたところ、ひいおばあちゃんは小

鬼の力によると説明していると聞いてあきれている様子。

エ　友梨がおまじないの仕方を秘密にしようとして毛糸を隠したのを見てしまい問いただすと、ひいおばあちゃんから教わったことを遠慮がちに話し出したので冷やかしている様子。

〔問6〕(5)編みかけのオタマジャクシが、友梨の手の中で、ほわっとあたたかくなったように感じられる。とあるが、「編みかけのオタマジャクシ」が「ほわっとあたたかくなったように感じられ」たわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　編みかけのオタマジャクシは気味が悪いと言われて腹が立っていたが、瑛人の言葉を聞いて楽しかった子供の頃の記憶がよみがえり心が和んで気分が明るくなったから。

イ　編みかけのオタマジャクシはデザインに凝りすぎたために思い通りにできず困っていたが、瑛人の言葉をきっかけに壁を乗り越えることができ希望がわいてきたから。

ウ　編みかけのオタマジャクシは今まで友梨の心を重くしていたが、瑛人の言葉によってありのままの自分でよいのだと思えてかき乱されていた気持ちが解きほぐされたから。

エ　編みかけのオタマジャクシは評判が良くないのでこれ以上作る意欲が失せていたが、瑛人の言葉に励まされて自分の好きなことだけを続ければよいと前向きになれたから。

〔問7〕(6)オタマジャクシの渦巻きから、まっすぐ伸びた糸が彼につながっているのが、なぜか妙にくすぐったかった。とあるが、この表現から読み取れる「友梨」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア　まっすぐ伸びた糸でオタマジャクシの入ったカバンと一緒に瑛人に強く引っ張られているので、何だかきまりが悪いようなうきうきするような気持ち。

イ　まっすぐ伸びた糸につながれて瑛人と歩く自分の姿は周りからどう見えるのだろうかと思うと、何だか落ち着かないようなそわそわするような気持ち。

ウ　まっすぐ伸びた糸を通して瑛人の不思議な感性がオタマジャクシに伝わっているように感じられ、何だかありがたいような申し訳ないような気持ち。

エ　まっすぐ伸びた糸が自分自身と瑛人をじかに結び付け互いの心を通じさせているように見えて、何だかうれしいような気恥ずかしいような気持ち。

4

次の文章を読んで、あとの各問に答えなさい。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

ことばと意味の関係は端的に次のようにまとめることができる：

ことばは意味を持たない。それは意味と〈なる〉のである

そしてことばが意味と〈ならない〉こともある　（第一段）

さらに言えば、〈意味となっているのか、なっていないのかさえ、不分明な言語場〉もいくらでもある。意味の実現は謂わば実現から非実現の濃淡の階梯（＊かいてい）＝グラデーションのうちにあると言ってよい。(1)意味の実現には濃淡がある。（第二段）

同一のことばであっても、言語場ごとに意味は異なって現れ得るということも、重要である。昨日読んだ本の全く同じ文なのに、今日読んだら、私の中に立ち現れるその意味が、何ともう違っているではないか。明日読んだら、また違って現れるかもしれない。愛するあの人の全く同じことばが、そう、あの時と今とでは、あまりにも異なった意味をもたらしている。目の前のこの人のことばは、ああ、そういう意味だったのか、さっきまでは全く解らなかったのに。（第三段）

これはまさに言語と意味をめぐる本質的なありようであり、今日の私たちにとってはいよいよ重要な前提である：

〈話されたことば〉であれ、〈書かれたことば〉であれ、言語が実現する場を〈言語場〉と呼ぶ

ことばが発せられても、＊当該（とうがい）の言語場で意味が実現するとは限らない

同じことばであっても、言語場ごとに異なった意味を実現し得る　（第四段）

ところが驚くべきことに、言語学はこうしたことに関心を払って来なかった。言語学は端的に言って、「意味が通じる」ことを前提にして、ものを考えて来たと言ってよい。ことばが意味を持っていて、そのことばをやりとりするのが、コミュニケーションである、といった具合に。従って、どうやったらうまくコミュニケーションができるか、などといった問いの立て方はしても、そもそもの出発点に、ことばが意味を実現したりしなかったりすることがあるなどという現実は――悲しいことに、そしてしばしば(a)滑稽なことに、こうした現実は私たちがこの地球上で日常的に経験している現実である――、言語学の思考の外にあったのである。（第五段）

いわゆる同じ言語の間でさえ、ことばが意味を実現しないことは、私たちが日々経験している通りである。まずほとんどの言語

に「それはどういう意味で言ってるの」とか「私はそんな意味で言ったんじゃないよ」といった類いの表現が存在するであろう。ことばが一定の意味を持っていて、それを遣り取りするのがコミュニケーションであるのなら、そうした表現が地球上で飛び交っている現実自体が、説明しにくい。（第六段）

ところで、一人が発することばを、複数の人が聞くという言語場が、いくらでもある。一人の発話者＝話し手がことばを〈かたち〉にして、それを三人の受話者＝聞き手が聞いたとする。そこには四通りの意味が実現し得るわけである。まず発話者自身が自らのことばに重ね合わせて造形する意味。そしてことばを聞いている受話者三人が、それぞれのうちで造形する意味。四人のうちに造形される意味には濃淡がある。意味のこの濃淡は、意味の造形の確かさの濃淡であって、一郎はAという意味を造形し、幸子はBという意味を造形し、マキはCという意味を造形する、などといった、いわゆる「意味の違い」だけではなく、ここで留意したいのは、それぞれの意味に形造られる確かさの濃淡である。一郎は確実にAという意味を造形し、幸子はなんとなくBという意味を、マキはひょっとしたらCという感じかな、くらいに意味を造形するなどといった、そうした意味の造形の確かさといったものである。もちろん、ことばの意味の造形に失敗する聞き手、即ち意味が実現しない受話者＝聞き手も生じ得る。（第七段）

要するに、複数の受話者が存在する言語場では、いわゆる「意味の違い」だけでなく、右のような、意味の造形の濃淡までが複合されて、文字通り、人それぞれの意味が立ち現れることになる。(2)これは〈話されたことば〉では日常のうちで目の当たりにする光景であろう。（第八段）

釈迦のことばを、例えば十大弟子のように、釈迦が直接語る言語場を共にする人々が聞く。*阿難陀が聞き、あるいはまた*提婆達多が聞く。もちろん釈迦のことばであっても、ことばはそれらことばに固有の意味を有しているわけではない。人は同じことばからそれぞれに自らの意味を造形し、記憶する。阿難陀は*多聞第一と賞され、提婆達多は釈迦に*違背したとされる人物であった。イエスのことばを使徒ヨハネが聞き、背信の汚名を着る*イスカリオテのユダも聞く。受話者が異なれば、造形される意味もまた、異なるのであり、意味の先の生き方もまた、いよいよ異なるであろう。（第九段）

言語学はこうした〈一人の話し手と複数の聞き手〉即ち〈一人の発話者と複数の受話者〉が存在する言語場についての意識は、ほとんど(b)皆無であったと言ってよい。一人が話し、一人が聞く、そうした言語場しかほとんど頭になかった。二〇世紀後半にはとりわけコミュニケーション論では講義や講演などにも関心は向いたけれども、聞き手が複数あるそうした言語場については、一人が話し、一人が聞くことが、単に複数存在するくらいにしか、扱われてこなかった。(3)いろいろな人がいるのだから、皆に解るようにきちんと

話そうね、そういったコミュニケーションの技法の平面で扱われるのが、せいぜいであった。ことは、ことばと意味の原理に係わっているのである。同一の言語場に受話者が複数存在するなら、たとえことばは一つであっても、そこには複数の意味が立ち現れることが、言語にとって原理的なありかたなのである。言語学はそうした深い原理的なところまで下降しては行かなかった。（第十段）

複数の受話者における意味のありようの多様さは、〈書かれたことば〉でもことは変わらない。同じホワイトボードの文字列の読み手、同じスクリーンの文字列の読み手＝受話者ごとに、同じ言語場であっても、意味の実現のしかたはそれぞれに異なっている。会議ではあなたが何の疑問も抱かない、自明と思うその文字列について、向いに座っている彼が、さも訝しげな表情で、発表者に質問していることだろう――「すみません、その○○○ってのは、どういう意味ですか」（第十一段）

ところで、同一の読み手＝受話者が同じ書物を異なった場で読む場合に、意味の実現のありようが異なるといったことは、どうなのだろう。これも答えは簡単である。同じ読み手であっても、言語場が異なっているがゆえに、意味の実現のありようが異なるわけである。前に読んだ同じ本を読んでいても、読み手はもう以前の読み手ではない。その時間的な間隙*の長さ如何に拘わらず、時が代わり、場が変われば、もう読み手の経験値は異なっている。自ずから、その時点でのその読み手が造形する意味も変化し得る。その場の環境のうちにあって、読み手の意味の造形の強度といったものも異なっているだろう。（第十二段）

例えば古典と呼ばれる書物が、古典として長らえていることを支えるのは、膨大な読み手＝受話者ごとに異なった意味が、まさに次々に実現しているという機制*である。なるほどその古典の内容は深いかもしれない。しかし古典に記されていることばそれ自体に、何かしら神秘的な力が備わっているわけではない。文字列自体は全く変わりがない。しかしそのことばに造形される意味は、言語場ごとに常に異なっており、さらには多くの人が概ね似たように造形していた意味でさえ、時と共にどんどん移り変わりもする。(4) 古典だから人々が読むのではなく、人々が読むが故に、古典なのである。同じ読み手＝受話者が異なった時間や空間で読めば、同一の同じ文字列であっても、言語場が異なることによって、意味の造形のしかたも異なってくる。これもまた、多くの読書人が経験するところであろう。（第十三段）

古典などといった書物を前に私たちは、その書物が私たちを支えてくれているように感じるかもしれない。もちろんそこにことばが記されているという点においては、その通りである。その書物には敬意を払うに値する。しかしながら、実はかくも多様な私たち、そうした私たちが駆動させる個々の言語場こそ、その書物が古典としていま・ここで生きることを、支えているのである。(c)（第十四段）

今少し考えを進めてみよう。同じ言語場において〈かたち〉となった一つのことばに、その言語場に参画する人の数だけの、異

なった意味が造形され得る。ことばと意味にとってこのことが原理的なありかただとすると、逆に、私たちは、個々にかくも異なった私たちを貫いて、ことばというものが働き得る仕掛けを、まさにその点にこそ見出すことができる。（第十五段）

ことばと意味について人々は古くから概ねこう考えてきた――ことばが特定の意味を持っているから、多くの異なった人々に通じるのだと。ことばは意味を持っていて、それを人々がやりとりしているのだと。ことばは意味を、つまり価値を持っていて――まるで貨幣のように――、それをやりとりするのがコミュニケーションであると、いつのまにか心のどこかで信じ切ってしまう。しかし事態は逆である。私たち皆それぞれのなかで造形される意味が異なるからこそ、ことばがことばとして生き続けるのである。ことばが私たちを繋いでくれているのではない。ことばを私たちが繋いでいるのである。私たちが私たちをことばで繋いでいる。謂わばこうした*パラダイムの転換を踏まえるだけでも、言語に対する私たちの構えは違ってくるだろう。（第十六段）

端的にこのように言ってもよい――私とあなたが異なるということ、それがことばがことばとして生きて働く仕掛けである。ことばに多様な意味を造形する、かくも多様な私たちの存在が、ことばを生きたことばとして、働かせている。私たちが皆、異なった人であること、そのことが言語を生きた言語たらしめている。（第十七段）

私たちが皆異なった人であるがゆえに、異なった人々の間で言語が働き得るというこのことは、言語というものの本質的な共生性の根拠でもある。（第十八段）

（野間秀樹「言語　この希望に満ちたもの」による）

〔注〕階梯（かいてい）――段階。
当該（とうがい）の――その。
阿難陀（あなんだ）――釈迦の弟子の一人。
提婆達多（だいばだった）――釈迦の弟子の一人。
多聞第一（たもんだいいち）――最も多く仏の話を聞いて記憶し、知識豊富ということ。
違背――背くこと。
使徒ヨハネ――イエスの弟子の一人。
イスカリオテのユダ――イエスの弟子の一人。
間隙（かんげき）――すきま。

機制 ―― 仕組み。

パラダイム ―― ある時代におけるものごとに対する考え方の枠組み。

〔問1〕 本文中の傍線を付けた(a)〜(c)の漢字の読みを書きなさい。

(a) 滑稽　(b) 皆無　(c) 参画

〔問2〕 (1)意味の実現には濃淡がある。とあるが、ここでいう「意味の実現には濃淡がある」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選びなさい。

ア ことばを用いてコミュニケーションを行う場面では、同じ意味を表す複数のことばの中からどのことばを用いるのかが人によって異なるので、ことばの選択に個性の違いが現れるということ。

イ ことばを用いてコミュニケーションを行う場面では、話のおおよその内容は必ず聞き手に伝わるものの、相手の語彙力によっては必ずしも細部まで間違いなく伝わるとは限らないということ。

ウ ことばを用いてコミュニケーションを行う場面では、発せられたことばの意味が相手に伝わらないこともあれば、伝わったとしても理解される意味が場面や人によって様々に異なるということ。

エ ことばを用いてコミュニケーションを行う場面では、相手がどのように理解するかは全く予想できないため、話し手・書き手の伝えたい意味が正確に伝わることはほとんどないということ。

〔問3〕 (2)これは〈話されたことば〉では日常のうちで目の当たりにする光景であろう。とあるが、「これ」の指し示す内容を本文中の語句を用いて三十字以上三十五字以内でまとめて書きなさい。

〔問4〕(3) いろいろな人がいるのだから、皆に解るようにきちんと話そうね、そういったコミュニケーションの技法の平面で扱われるのが、せいぜいであった。とあるが、ここでいう「せいぜいであった」の意味に最も近いのは、次のうちではどれか。

ア まれな状況だった
イ 一般的な方法だった
ウ 精一杯のところだった
エ 明快な手段だった

〔問5〕この文章の構成からみた第十二段の役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べてきた内容について、わかりやすくまとめることで論旨を理解しやすくしている。
イ それまでに述べてきた内容に対して、反対の立場から別の事例を示して話題の転換を図っている。
ウ それまでに述べてきた内容を打ち消して、新たな視点を示すことで問題点を整理している。
エ それまでに述べてきた内容を受けて、さらに関係の深い話題を挙げて論の展開を図っている。

〔問6〕(4) 古典だから人々が読むのではなく、人々が読むが故に、古典なのである。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選びなさい。

ア 古典は単に古くて有名だから読まれ続けるのではなく、ことば自体が持つ不思議な力が人々をひきつけ長きにわたり読み続けられることによって、古典として存続していると考えているから。
イ 古典は単に古くて有名だから読まれ続けるのではなく、多種多様な人々に自らの経験に基づいたそれぞれ異なる理解の仕方で読まれることによって、古典として存続していると考えているから。
ウ 古典は単に古くて有名だから読まれ続けるのではなく、作品が多くの人々を勇気づけ生きる手助けとなり時代を超えて読み継がれることによって、古典として存続していると考えているから。
エ 古典は単に古くて有名だから読まれ続けるのではなく、どの時代や文化にも通じる普遍性があるために様々な人々に広く読まれることによって、古典として存続していると考えているから。

〔問7〕 本文中に述べられていることと一致するものを次のうちから**二つ**選びなさい。

ア これまでの言語学は相手に意味が伝わることを前提とし、コミュニケーションとはことばが持つ特定の意味をやりとりするものと認識されてきたため、意味が伝わらない場合のことは考えてこなかった。

イ 異なる言語を用いる人の間では相手にことばの意味が伝わらないということが日常的に生じているが、同じ言語を話す人の間においては、相手に意味が伝わらないということは極めてまれである。

ウ 講演会ではどんなに多くの聴衆が集まっても、講師が自分の発することばの意味が全員に伝わるよう意識的に工夫して話すので、会場にいるすべての人に一斉に同じ情報や考えを伝えることができる。

エ 異なる人々がコミュニケーションをとっていく中で、人々がことばに様々な意味を生みだしていくという点で、ことばを用いる人々の多様性こそが言語を生きたことばとして成り立たせている。